

author

緒莉

illustration

TOMA

original work

ApRicoT Cherry

シス えむっ娘 タイ ーズ



ふじばら文庫

「うそ……こんな……硬い……」

驚きと困惑でどうしていいかわからないのか、珠姫はそのままおとなしく周治の股間に手を置いている。珠姫に触れられていると思うと、周治はもうそれだけで暴発してしまいそうなほど興奮してしまう。

「珠姫さんっ」

もう我慢できない。周治は珠姫をきつく抱きしめた。そうすると当然、硬くなったモノが珠姫の下腹部辺りにゴリゴリと当たってしまう。

「あっ……だ、だめよ、そういうことは結婚してからでないと……」

そう言っただけで珠姫は、真つ赤な顔をして腰をくねらせた。だがここまでしても、直接的に周治を拒否するような言葉は出てこない。

嫌われてはいないという確信を持った周治は、より大胆に珠姫にせまりだす。

「俺のこと、嫌いではないってことですよね？ 珠姫さん、俺、珠姫さんが好きですっ」

「周治くん……」

「珠姫さんが好きだから、こんなふうになっちゃいます、もう、自分でも、どうしようもなく……うう……」

周治の腰が、ペニスを珠姫に擦りつけるようにカクカク揺れる。動かそうとしているのではなく、勝手にそうになってしまうのだ。

「周治くん……」 珠姫の顔に、同情するような表情が浮かんだ。「そんな、つらそうな顔しないで」

「だって……くうっ、つらいんですっ」

本当につらかった。このまま出さずにいたら、気が狂いそうだ。

「でも……私……結婚するまでは……」

優しい珠姫は、苦悶する周治を振り払って逃げることもできず、困惑した様子だ。この様子だと、セックス以外のことなら応じてくれるかもしれない。

一か八か、周治は代替え案を提案してみることにした。

「あの……お願いします、せめて、手で……してもらえませんか」

「えっ……」

珠姫は絶句してしまったが、拒絶する言葉はその口から出てこない。ならばと、周治は手早くチャックを下ろし、イチモツを取り出して、珠姫に直接握らせた。

「あっ……」

珠姫の手の上から、ペニスをぎゅっと握り、軽くしごいてみる。

「こういうふう……してももらえると、ラクになるんです」

「いやああ……こんな……か、硬い……」

珠姫の顔は真つ赤だが、チラチラと自分の手の辺りを見ている。恥ずかしくてたまらな

いようではあるけれど、嫌悪感を抱いてはいないように見える。

「珠姫さん……お願いします……」

返事を待たず、周治はいったん珠姫の手をはずし、手近にあった椅子に座った。そして珠姫を足下に座らせ、ちょうど顔の前にペニスがくるようにした。

「……やあ……」

珠姫は手で顔を覆い、ちらっとペニスを見た。ちらり、ちらりと、何度も視線をやり、そのうち、指の隙間からじっと見つめるようになった。最初の衝撃が過ぎ、初めて見る男性器に好奇心が湧いてきたようだ。

珠姫に見られていると思うと、ぞくぞくしてしまい、ぴくんとペニスが震える。

「きゃっ、動いた!」

「興奮してるからです」

周治は珠姫の右手を取り、再びペニスを握らせた。

「擦ってください、お願いします」

「あうう、で、でも……」

「出せば、落ち着きますから……出さないと、俺もう自分を抑えきれなくなってしまうそうなんです。そうになったら、珠姫さんに、何してしまおうか……」

「そんなっ……」

「だから、お願いします」

珠姫の手ごとペニスを握り、ゆっくりと擦りはじめた。

「あ……あうう……」

葛藤しているようだが、珠姫は逃げない。十往復くらいしごいてから、周治はそつと手を離れた。それでも、珠姫の手は離れず、ゆるゆると幹をしごき続ける。

「もう少しだけ、強めに握ってください」

「あ……うん……」

珠姫は素直に指示に従い、細くてきれいな指に力を込めた。

（珠姫さん……けっこう、押しに弱いみたいだな……）

ぎこちない動きで、しゅっしゅつと、珠姫の手がペニスを擦る。

「お、男の子のこれって、こんなに硬くなるのね……」

「ええ。一度、出さないと、ずっとこのままなんです」

「そ、そうなんだ……大変なのね……」

ちよつと嘘を言ってみたのだが、珠姫は信じたようだ。

「もう少し強く握って、根元からくびれたところまで、丁寧にしごいてもらえますか」

「こ、こう……? 痛くない?」

「大丈夫です。もっと強くてもいいくらい」



「そうなの……じゃあ……」

イチモツに心地よい圧力を感じ、周治は大きく息を吐いた。

「はああ……気持ちいいです、すごく……」

全校生徒の憧れの対象である珠姫が、自分のペニスを擦っている。いかにも慣れている感じが、手つきがまた、たまらない。

いつしか、珠姫の表情から困惑と羞恥の色は消え、代わりに好奇心と興奮が現れてきた。

「こ、これ続けると、射精するの？」

「そう、ですね……上下に擦るとき、先っぽのくびれているところ——この辺を、指で引っかけるといいにしてももらえると、もっといいです」

「こ、こう……かな……？」

「そうしながら、もっと、こうぐいぐいと……」

サオを擦っていた手の動きが、大きくなる。カリをぐりぐりと擦られると、痛みに近い快感が走った。

「あ……ね、ねえ……周治くん……何か出てきたんだけど……」

亀頭の先端、鈴口から、透明な粘液が滲み出てきた。

「ああ、それは、先走りです。男が気持ちよくなると、出てくるんですよ」

「そうなの……男の子も、濡れるのね……」
 「握って、その汁を絡めて、ぬるぬるさせて……」

「う……こうね……」
 ぬめる指が敏感な場所を刺激するたび、新しい先走りが滲む。珠姫の手が動くたび、くちゅくちゅといやらしい音が立ち、その音に比例するように、周治の快感は増幅していく。

「うう……ふう、はあ、はあ、はあ……ん、ん、んっ……」

珠姫の息が、まるで自分の方が愛撫されているみたいに荒くなってきた。結婚するまで処女を守ろうと心に決めるほど清純だったはずの珠姫が、ペニスをしごきながら激しく興奮していた。

「ん、お、お……すごいやらしいです、珠姫さん……！　そう、そこ……それ……！」
 「こうね、ここを……これくらい？」

珠姫が目を熱っぽく潤ませ、自分から指を亀頭に這わせてきた。

「ああ……いけないわ、こんな……いやらしい……」

熱に浮かされたように呟く珠姫。周治はうめき声を漏らし、快感におぼれる。やがて、腰の奥から、熱い塊がものすごい勢いで、せり上がってきた。

出してしまうと、この快感は終わってしまう。そうわかっていても、一刻も早く出した

いという衝動を抑えることはできそうにない。

「すごい……びくんびくんしてる……これ、どんどん熱くなってきた……」

赤らんだ頬、泣きそうに潤む目、ひくつく小鼻に半開きの唇。濡れて、涎がこぼれそうな唇を、ピンク色の舌が細かく舐めている。

「何か出そうよ……出そう……射精しそうなのね……」

珠姫は空いてる手の指で、先走りの漏れる鈴口をぬるぬると撫で回した。

「んおっ、そ、それっ、まづいっ……だめっ！」

慌てて珠姫を静止しようとしたが、もう遅かった。

「くううっ！」

目もくらむような快感を伴って、ペニスの先端から熱い精液が勢いよく迸り出る。

「あっ……きゃああっ！」

白濁液に顔を直撃され、珠姫は驚いた声を上げた。

「あっ……ご、ごめんなさいっ……でも、止まらないっ」

ドバドバッと、すごい量の精液が、珠姫の美しい顔にかかる。驚きすぎて顔を逸らすこともできないのか、珠姫はぽかんと口を開けたまま、最後まで顔射され続けた。

ぶちばら文庫

えむっ娘シスターズ

2011年 10月28日 初版第1刷発行

■著 者 緒莉
■イラスト TOMA
■原 作 ApRicoT Cherry

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©ORI©Apricot Cherry

Printed in Japan 2011

PP028